那珂（なか） 55

── 那珂遺跡群第120次調査報告 ──

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1036集

調査番号　0 7 2 9
遺跡略号　NAK－120

2009
福岡市教育委員会

序

二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、二十一世紀のアジアに開かれた都市として、更なる発展を目指してさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、福岡市立那珂中学校講堂兼体育館の耐震改修に伴う屋外施設の建設に先立って実施した那珂遺跡群第120次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、古墳時代後期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡と古代の溝が発見されました。殊に、古代の溝からは行基式軒丸瓦や単弁の軒丸瓦が出土しました。那珂丘陵からは、このような瓦が各調査区で発見されており、古代寺院あるいは官衙の存在が示唆されていましたが、今回の発見はこの説を補完する貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　山田　裕嗣

れいげん

1．本書は、福岡市教育委員会が福岡市立那珂中学校講堂兼体育館耐震改修に伴う屋外施設の建築に先立って、2007（平成19）年8月9日～8月28日までに福岡市博多区那珂2丁目18番1号で緊急発掘調査した那珂遺跡群第120次調査の発掘調査報告書である。
2．本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3．遺構は、建物跡をSB、竪穴住居跡をSC、溝遺構をSD、ピットはSPと記号化して呼称し、その後にすべての遺構を通番して01からナンバーを付した。
4．本書に掲載した遺構と遺物の実測は小林義彦が作成した。
5．本書に掲載した遺構と遺物の製図は、小林が作成した。
6．本書に掲載した遺構と遺物の写真は小林が撮影した。
7．本書の執筆・編集は小林が行った。
8．本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号：0729	遺跡略号：NAK−120	分布地図番号：024−0085
調査地籍：福岡市博多区那珂2丁目18番1号		
工事面積：1,273m²	調査対象面積：88m²	調査実施面積：128m²
調査期間：2007年8月9日～8月28日		

本文目次

序
Ⅰ．はじめに …… 1
　1．発掘調査にいたるまで …… 1
　2．発掘調査の組織 …… 1
　3．立地と歴史的環境 …… 5
Ⅱ．調査の記録 …… 7
　1．調査の概要 …… 7
　2．竪穴住居跡 …… 9
　3．掘立柱建物跡 …… 13
　4．溝遺構 …… 17
　5．その他の遺構と包含層の遺物 …… 18
Ⅲ．おわりに …… 18

挿図目次

1　周辺遺跡分布図（1／25,000） …… 2
2　那珂遺跡群周辺旧地形図（1／20,000） …… 3
3　那珂遺跡群位置図（1／10,000） …… 4
4　那珂遺跡群第120次調査区位置図（1／1,500） …… 6
5　第120次調査区周辺現況図（1／500） …… 7
6　遺構配置図（1／100） …… 8
7　調査区全景（北より） …… 9
8　1号住居跡実測図（1／50） …… 10
9　1号住居跡全景（北より） …… 10
10　1号住居跡出土遺物実測図（1／3） …… 11
11　1号住居跡出土遺物（縮尺不同） …… 11
12　2号住居跡実測図（1／50） …… 12
13　2号住居跡全景（北東より） …… 12
14　2号住居跡カマド内遺物出土状況（南西より） …… 12
15　2号住居跡出土遺物実測図（1／3） …… 13
16　2号住居跡出土遺物（縮尺不同） …… 13
17　4～10号建物跡実測図（1／80） …… 14
18　42・43号建物跡実測図（1／80） …… 15
19　4～6・42・43号建物跡全景（北より） …… 15
20　6～10号建物跡全景（北より） …… 15
21　3号溝断面実測図（1／60） …… 16
22　3号溝出土遺物実測図（1／3） …… 16
23　3号溝土層断面（北より） …… 17
24　3号溝・包含層出土遺物（縮尺不同） …… 18
25　包含層出土遺物実測図（1／3） …… 18

表目次

Tab．1　掘立柱建物跡一覧表 …… 13

Ⅰ．はじめに

1．発掘調査にいたるまで

那珂遺跡群は、福岡平野を北流する那珂川と御笠川に挟まれて長くのびる春日丘陵の北部に位置し、昭和40年代にはのどかな田園風景が拡がっていた。しかし、急速に進む郊外の市街化で丘陵上は宅地化し、更には筑紫通りなど都市計画道路の整備によって建物の高層化が進んで、往年の田園風景は失われつつある。那珂二丁目周辺も、わずかな畑地を残して一帯は宅地と化し、その中に福岡市立那珂中学校がある。この那珂中学校の歴史は古く、子どもたちが学ぶ校舎も老朽化が進んでいた。

平成17（2005）年３月20日、「福岡西方沖地震」が発生して多くの建造物に被害が及んだ。これまで無縁であった地震に人々は驚き、地震に対する安全対策が急務となった。多くの子どもたちが学ぶ学校は、その対策が急がれる優先の施設である。教育委員会施設整備課では、学校施設の耐震化を計画し、順次着手した。那珂中学校の体育館の耐震改修と屋外施設の建設もその一つである。

那珂丘陵は、春日丘陵から比恵へと延びる低丘陵の中の一支丘で、周辺の発掘調査例からその丘陵上には弥生時代や古墳時代、古代の遺構が濃密に拡がっている。那珂中学校は、この那珂丘陵の只中にあり、遺構の存在が十分に予測された。平成19（2007）年４月26日、施設整備課から屋外施設建設地内における埋蔵文化財の有無についての照会が埋蔵文化財第１課に提出され、６月27日に確認調査を実施した結果、柱穴を伴う集落遺構の一部が確認された。事業の緊急性から同工事は既に発注され、工期も確定していた。併せて発掘調査は、生徒への配慮から夏休み中の実施が求められた。発掘調査は平成19（2007）年８月９日から、盆休みを挟んだ2週間の予定で着手した。

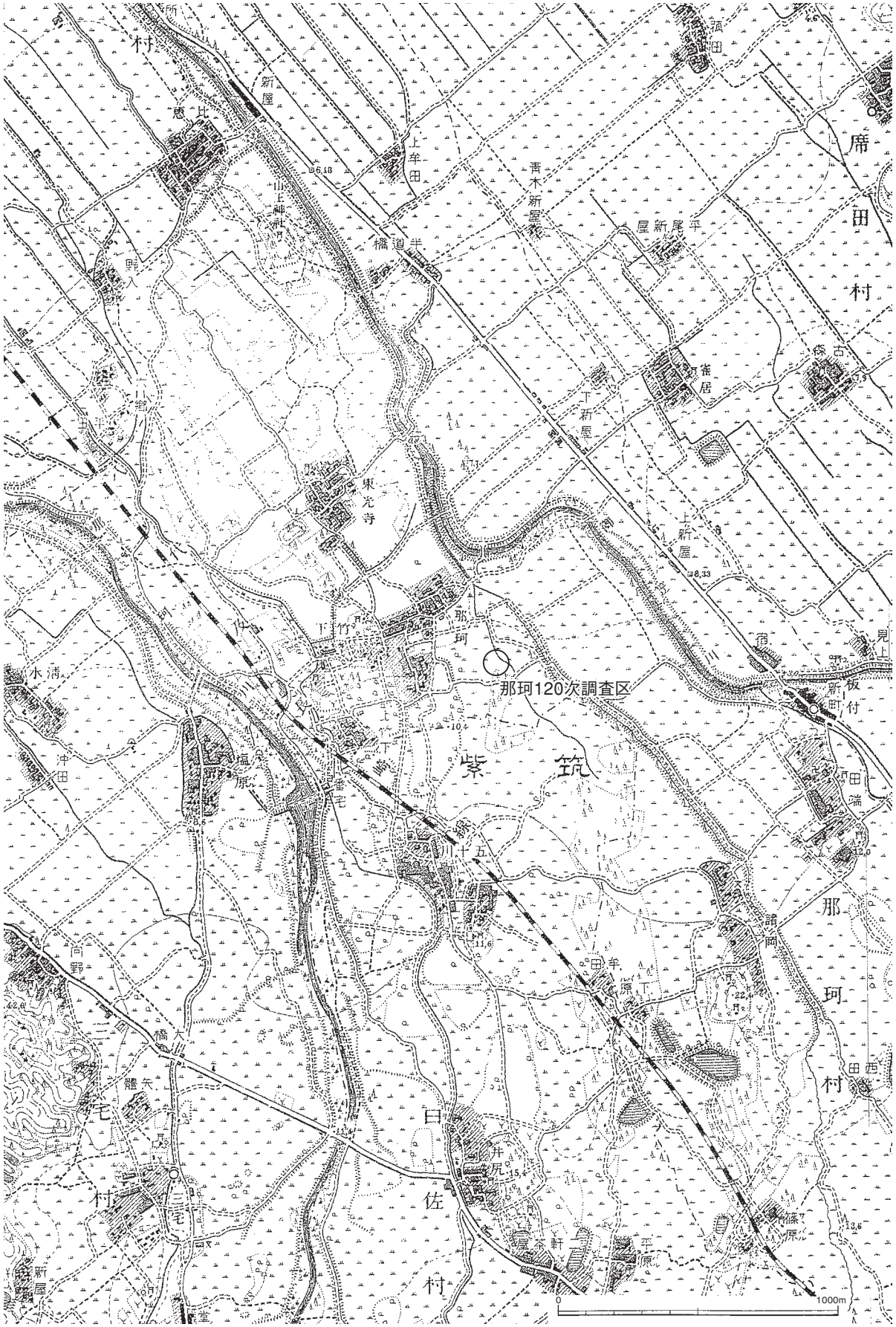
発掘調査では、当初の予測に反して古墳時代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡など多くの遺構を検出したが、調査の終了を控えた８月20日から22日には３日連続して局地的な集中豪雨に見舞われ、調査区全体が再三冠水した。これは発掘調査の終了に大きな支障が生じた。同時に冠水によって柱穴内の遺物が浮遊して出土遺構の特定不能と云う不測の事態が生じた。しかしながら、関係者諸氏の協力により８月28日に現状に復して発掘調査を終えた。発掘調査は、焼け付く夏の太陽に悩まされながらも調査に従事した方々の労苦に負うところが大きく、改めて謝意を表します。

2．発掘調査の組織

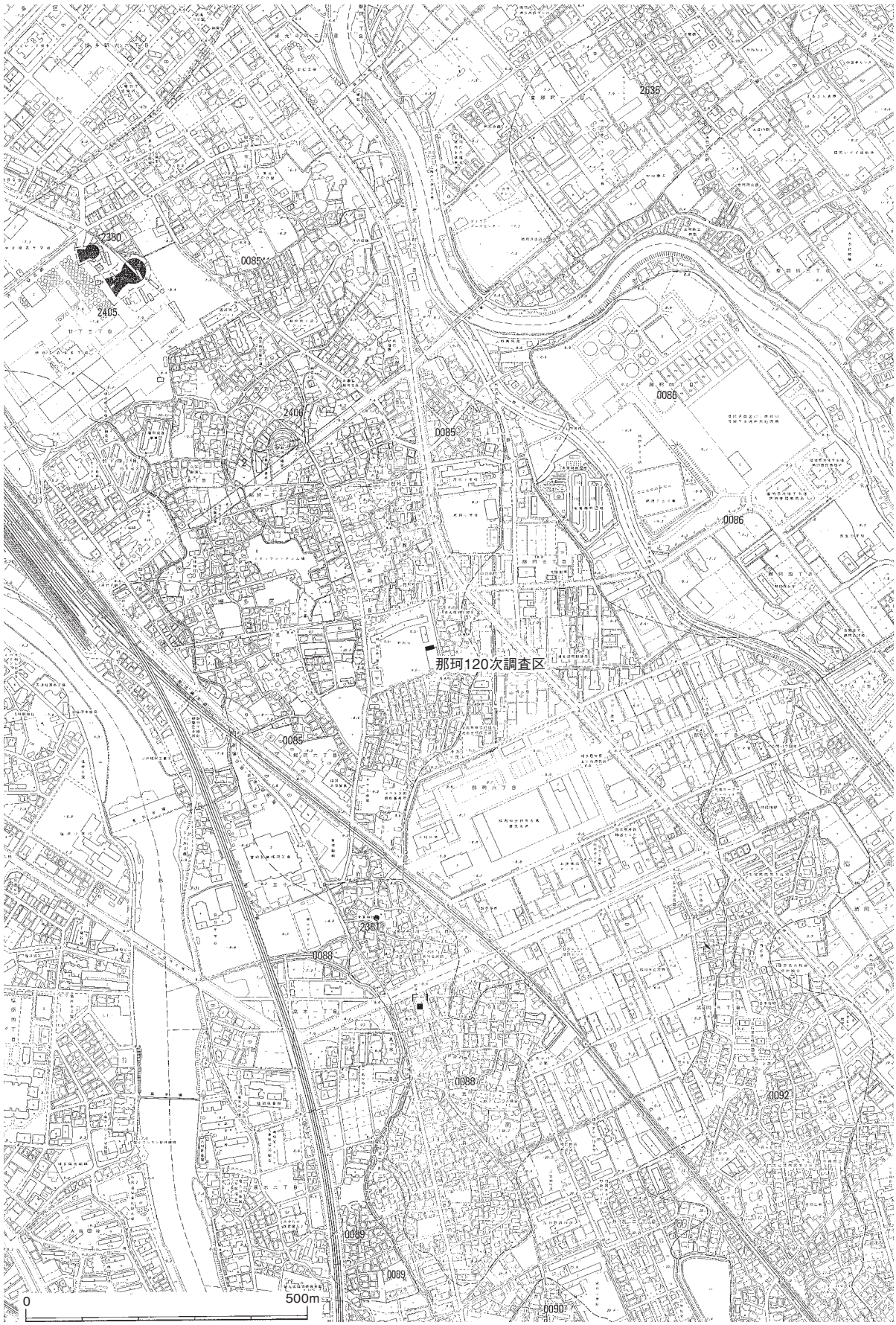
調査委託　福岡市教育委員会施設部施設整備課（前総務部施設整備課）
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　文化財部埋蔵文化財第１課
　文化財部長　矢野三津夫
　埋蔵文化財第１課長　山口譲治
　埋蔵文化財第１課調査係長　米倉秀紀
調査庶務　文化財管理課　榎本芳治　古賀とも子（現任）　鈴木由喜（前任）
調査担当　埋蔵文化財第１課調査係　小林義彦
調査・整理作業　石橋陽子　伊藤美伸　今村ひろ子　大瀬良清子　坂梨美紀　知花繁代　塚本よし子
　土斐崎孝子　西田文子　馬場イツ子　濱フミコ　播磨博子　福田操　松尾千寿
　松下さゆり　三栗野明美　森田祐子　矢川みどり　山口慶子　吉川貴久

発掘調査にあたっては、那珂中学校の先生方や教育委員会施設整備課の方々に多くのご協力とご配慮をいただいた。

1　周辺遺跡分布図（1／25,000）



2　那珂遺跡群周辺旧地形図（1／20,000）



3　那珂遺跡群位置図（1／10,000）

3. 立地と歴史的環境

那珂遺跡群のある福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘に開いた博多湾に面した沖積平野である。この福岡平野の中央部には那珂川と御笠川が北流して博多湾に注ぎ込み、その両河の間には須玖岡本から断続的に長くのびる洪積台地が形成されている。春日丘陵と総称されるこの洪積台地は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層には阿蘇山の火砕流による八女粘土層と鳥栖ローム層が堆積している。この春日丘陵は、奴国王の王墓地とされる須玖岡本から井尻、五十川を経て那珂、比恵へと続いて博多湾の海岸砂丘に北面しており、それらの丘陵上には、後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連綿と複合的に展開している。殊に、弥生時代から古代にかけての濃密な分布状況を示している。

那珂遺跡群は、この春日丘陵の北端に位置し、比恵遺跡群と同じ丘陵上に立地しているが、便宜的に北半部を比恵遺跡群、南半部を那珂遺跡群と呼称している。第120次調査区は、この那珂遺跡群のほぼ南部に位置している。南側には御笠川の解析による細長い谷が東から幾筋も湾入し、その東南辺に拡がる低地には那珂深ヲサ遺跡などの低湿地遺跡が立地している。

那珂・比恵遺跡群では、1938（昭和13）年の区画整理時に発見された環濠集落の調査以来、これまでに240カ所以上の地点で発掘調査が実施され、台地上において連綿と営まれた各時代の集落や墳墓地の様相が次第に明らかになりつつある。ここで那珂遺跡群周辺を概観すると、丘陵の南東縁（38･41次）で、ナイフ形石器や彫器、剥片などの旧石器時代の遺物が出土しているが、散逸的な分布にすぎない。

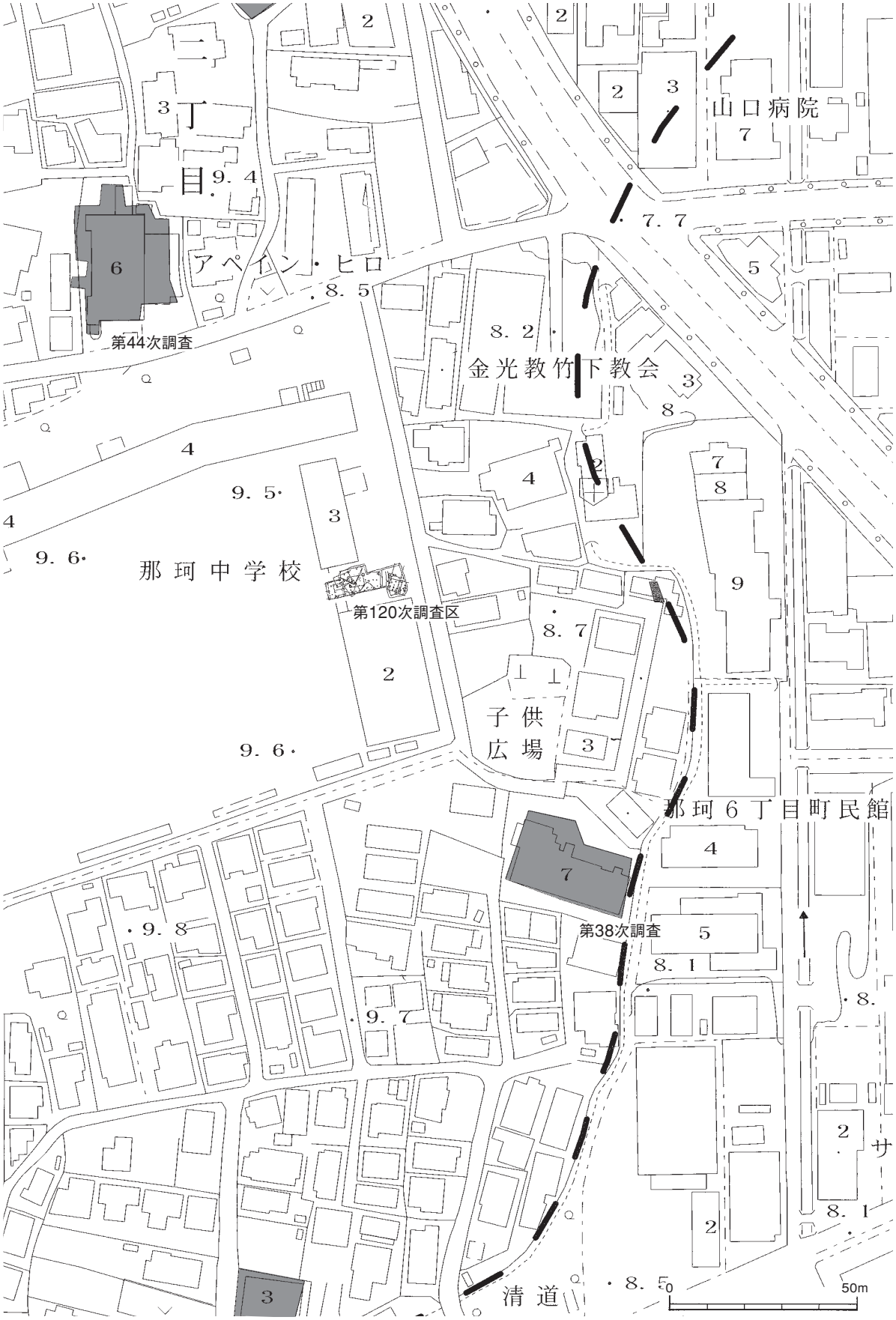
次の縄文時代も早期から晩期前半までは、石鏃や石匙、土器片などが断片的に出土しているが、遺構に伴った明確なものはなく、その在り様は前時代と大差はない。この傾向は、比恵遺跡群においても同様である。

弥生時代になると、台地の縁辺部で竪穴住居や貯蔵穴群などの遺構が広がり、斜面には土器や石器、木器を伴う包含層が形成される。集落域は尾根上へと次第に拡大していく。台地の南西縁（37次）に夜臼期から前期前半の二重環濠集落が営まれる。また、中央部の尾根上（67次）でも貯蔵穴群を伴った環壕集落が営まれ、北西縁のアサヒビール工場内や東縁部にも貯蔵穴群が拡っている。前期後半から中期になると集落域は、縁辺部から尾根上へと次第に拡大していく。比恵遺跡群の北側でも集落の拡大が見られる。

中期後半から後期には、那珂・比恵遺跡群とも台地上の全域が集落域と化する感がある。井戸群や環濠のほか、銅剣や銅矛などの鋳型や中子なども出土する遺構も出現し、青銅器を生産する工人集団の工房群が台地の尾根上に存在したことが窺われる。また、集落域の周辺には墳丘墓をはじめとする甕棺墓群も造営され、遺跡の性格も拡大・多様化する。比恵遺跡群の中央部にある６次調査区では、細形銅剣を副葬する甕棺墓も出現する。遺物も、金属器や各種木製農耕具、漆製品などが出土している。

古墳時代になると、台地の中央部に福岡平野で最古期の前方後円墳である全長85mの那珂八幡古墳が造営され、その木棺内には三角縁神獣鏡が副葬されていた。これに続いて６世紀後半には、那珂八幡古墳周辺の台地上に東光寺剣塚古墳と剣塚北古墳の２基の前方後円墳のほか前方後方墳が造営される。このうち、東光寺剣塚古墳は、全長が140mで三重の周溝をもつ筑前地域で最大級の前方後円墳である。この時期の集落は、那珂から比恵の台地上に広く展開する。また、企画性の高い柵列に囲まれた大型建物も台地上の各所に出現する。殊に、紀記に記された「那津官家」とされる大型建物群が、比恵遺跡群北西部の台地上（８次・72次、109次）に拡がっており、平野内の拠点的な集落として一翼を形成している。

古代には、台地の中央部に正方位の溝や大型建物、井戸などがあり、何らかの官衙的な施設や寺院



4　那珂遺跡群第120次調査区位置図（1／1,500）

などの展開が想起される。更に、中世には、台地上に溝で区画した居館遺構が存在し、この時期まで平野内において中心的な役割を担っていたものと考えられる。

Ⅱ. 調査の記録

1. 調査の概要

那珂遺跡群は、春日市の須玖岡本から井尻を経て那珂、比恵へと北へのびる標高が10m余の洪積台地の北部に位置し、東西が700m、南北が2,000mの範囲に亘って拡がっている。この那珂丘陵は本来的には11～12m余の丘陵で、その尾根上には那珂八幡古墳や東光寺剣塚古墳などの前方後円墳が立地し、その周辺には弥生時代の甕棺墓や土壙墓などの墳墓域と竪穴住居跡や貯蔵穴群などの集落群をはじめ、古墳時代や古代の遺構群が広く複合的に展開している。

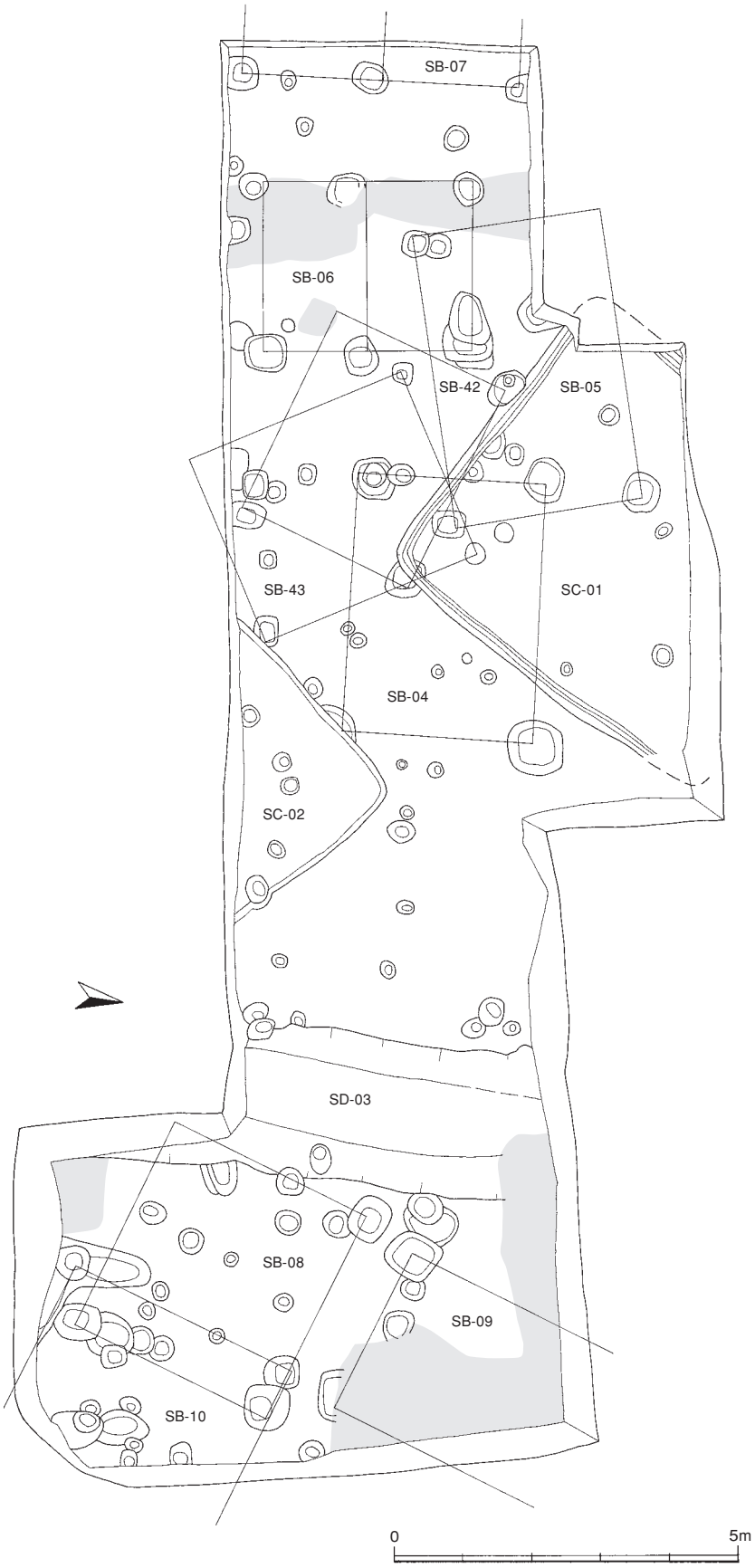
第120次調査区は、この那珂遺跡群の南東端に位置し、すぐ東には御笠川と諸岡川の浸食による開析谷が南北に彎入して古代には水田域が拡がっていた。本調査区がある那珂中学校内や周辺の調査でも弥生時代や古墳時代の集落域が拡がっていることが報告されている。試掘調査では柱穴が検出された。同時に、包含層から弥生土器片が採集されたことから弥生時代以降の集落域が拡がっていることが予測された。

屋外施設の建設地は、講堂のポーチに接して設定されていたが、ここにはポーチの階段跡で鉄筋がむき出しの状態になっていた。このような状況下で十分な調査範囲の確保が不可能であった。そのた

5　第120次調査区周辺現況図（1／500）

め調査区を少し校舎側にずらして東西に長く、トレンチ状に設定した。表土層を除去すると調査区の中央部で２棟の竪穴住居跡を検出したが、いずれも全容が把握できるものではなかった。しかしながら北側の１棟（SC－01）は、調査区を北へ拡げることで全容の把握が可能と判断されたので、北側へ最大限に拡張した。その結果、北壁の東隅壁は撹乱を受けて消失していたが、西側は壁面の一部を検出して法量的な最低限の確認をすることができた。また、調査区の東端には磁北方向に沿って延びる溝があり、その埋土中から平瓦や丸瓦が出土した。周辺域の調査で出土した瓦類と併せて重要な発見となり、詳細に検討して論じることが必要である。

発掘調査の終了を８月22日に控えた20日～22日には局地的な集中豪雨に見舞われた。その結果、大きなダメージと共に日程の遅延を余儀なくされたが、関係者諸氏の協力で28日に調査を終えることができた。改めて関係者諸氏に謝意を表します。



６　遺構配置図（1／100）

2. 竪穴住居跡（ＳＣ）

竪穴住居跡は、調査区のほぼ中央部で2棟を検出した。このうち大きさが復原できるものは１棟（SC－01）で、プラン的には一辺が５～６ｍの方形である。これらの竪穴住居跡は、掘立柱建物跡の埋没後に開削されたもので、両者間には若干の時間差があるように考えられる。しかし、覆土中の遺物には大差がなく、ひとつの集落域の拡がりの中で把えられる可能性がある。一方、調査範囲が狭小なため集落域の拡がりは明らかでない、周辺域の調査成果からすると丘陵全域にわたって展開していたものと考えられる。

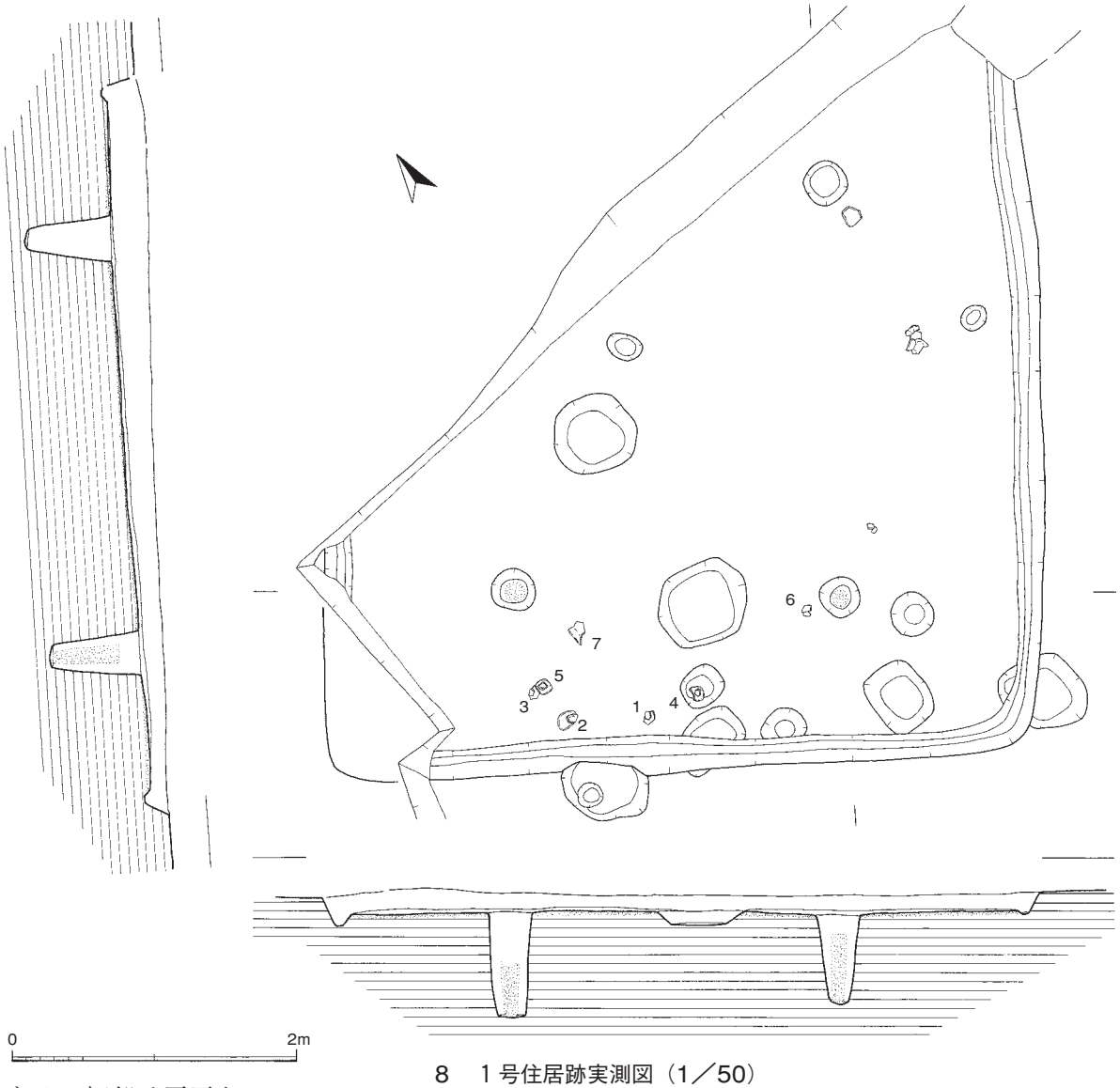
１号住居跡　SC－01　（8・9）

１号住居跡は、調査区の北西部にあり、東壁は２号住居跡の西壁と2.3mの空間を隔てて並置している。平面形は、東西長が5mで南北長は主柱穴の柱間から5.3mほどの方形プランをなそう。壁面は、急峻に立ち上がり、壁下には幅が10～15cm、深さが５～８cmの断面形が浅いU字状をした周溝が巡っている。床面は、２～５cmほどの厚さで黄褐色粘土を固く敷き詰めて貼床としている。この床面上には４・５号建物跡の柱穴が掘り込まれているが、その覆土上には黄褐色粘土の貼床が薄くブロック状に敷き詰められていた。主柱穴は、４本柱で柱間は東西間が2.3m、南北間が３ｍである。柱穴は、直径が25～30cmの円形プランをなす。深さは65～75cmと深く、直径が10～13cmの柱痕跡が遺存していた。カマドは東壁と南壁にはないが、２号住居跡の例から北壁あるいは西壁に付設されている可能性が十分に考えられる。遺物は、東壁や南壁際に沿って土師器高坏や甕のほか須恵器坏等が床面上に散乱していたが、量的には少ない。

出土遺物　（10・11）

１～５は、土師器高坏である。１は坏部口径が14.1cm、脚径が9.4cm、器高は8.9cmで全体に歪みが

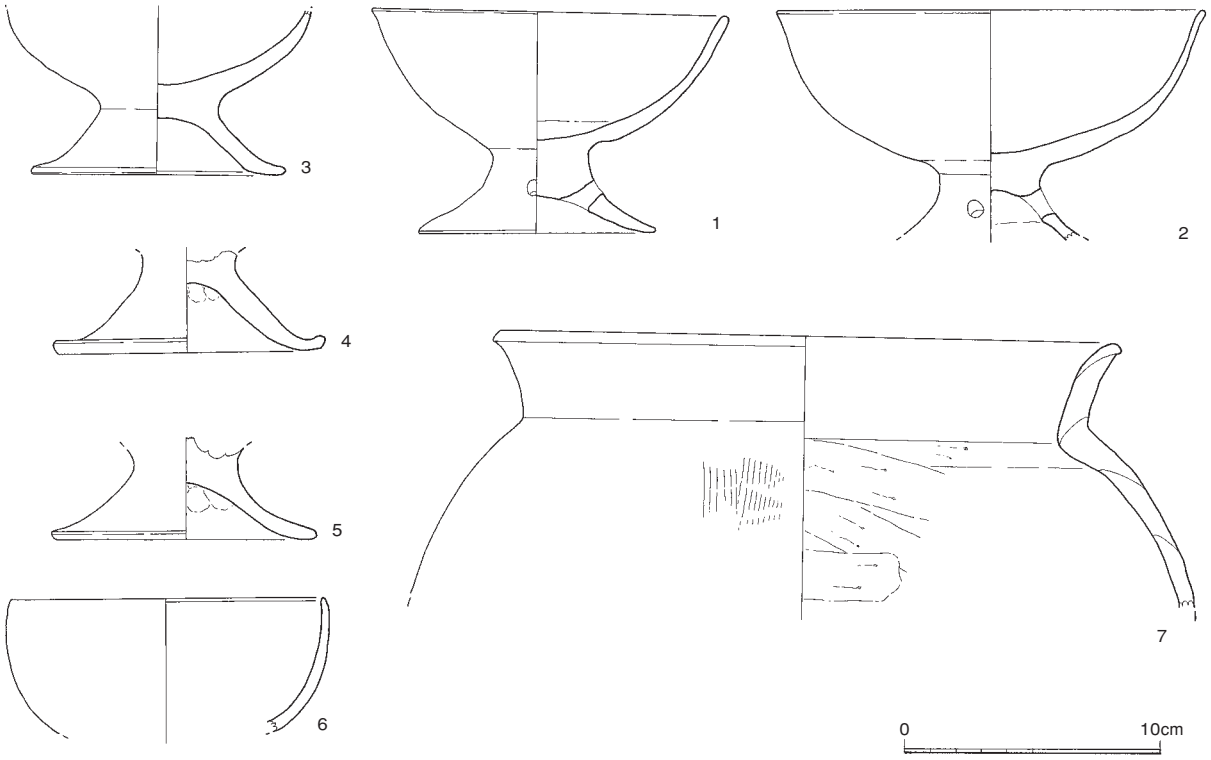
７　調査区全景（北より）



8　1号住居跡実測図（1／50）

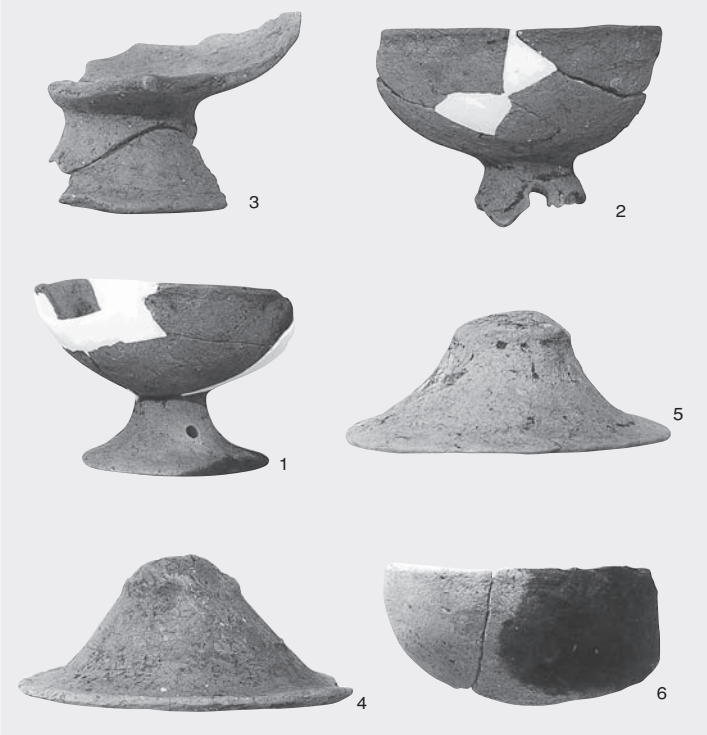
ある。坏部は扁平な半球形で、口縁部は外方へストレートに開く。脚部は短く朝顔状に外反し、中位に1孔を焼成前に穿つ。調整は坏部がヨコナデ、内底は押圧ナデ。脚部外面はタテ方向の丁寧な研磨状のナデ。胎土は精良で微細～小砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。色調は明黄橙色。2は坏部口

9　1号住居跡全景（北より）



10　1号住居跡出土遺物実測図（1／3）

径が17cmで、脚裾部を欠く。坏部は扁平な半球形で、口縁部は小さく外方に摘み出している。脚部は短く朝顔状に開き、坏部との接合部下に3孔を対称位に穿っている。摩滅が著しいが、坏内面には研磨状痕が残る。胎土は精良で、微細～小砂粒のほか少量の雲母微細とシャモット様の赤褐色粒を含む。色調は明赤橙色。3は脚径が10cm。坏部は扁平な半球形で、短く朝顔状に外反する脚裾は水平に摘み出している。胎土は精良で、被熱による赤変がある。色調は明赤褐色。4・5は短く朝顔状に外反する脚部である。4は脚径が10.7cm。5は脚径が10.5cm。脚裾は端部を上方に跳ね上げるように小さく摘み上げている。調整は外面が研磨状の粗いナデ、内面は押圧ナデで坏部との接合面は強く押厚している。胎土は精良で微細～小砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。明赤橙色。6は口径が12.4cmの土師器椀である。体部は半球形で、シャープに摘み上げた口縁部は小さく内傾する。胎土は精良で微細砂や雲母微細のほかにシャモット様の赤褐色粒を含む。色調は淡明黄橙色。7は口径が24.8cmの土師器甕である。「く」字状に外反する口縁部は外唇を小さく摘み出している。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は内面が粗いヘラケズリ、内面はタテハケ目。



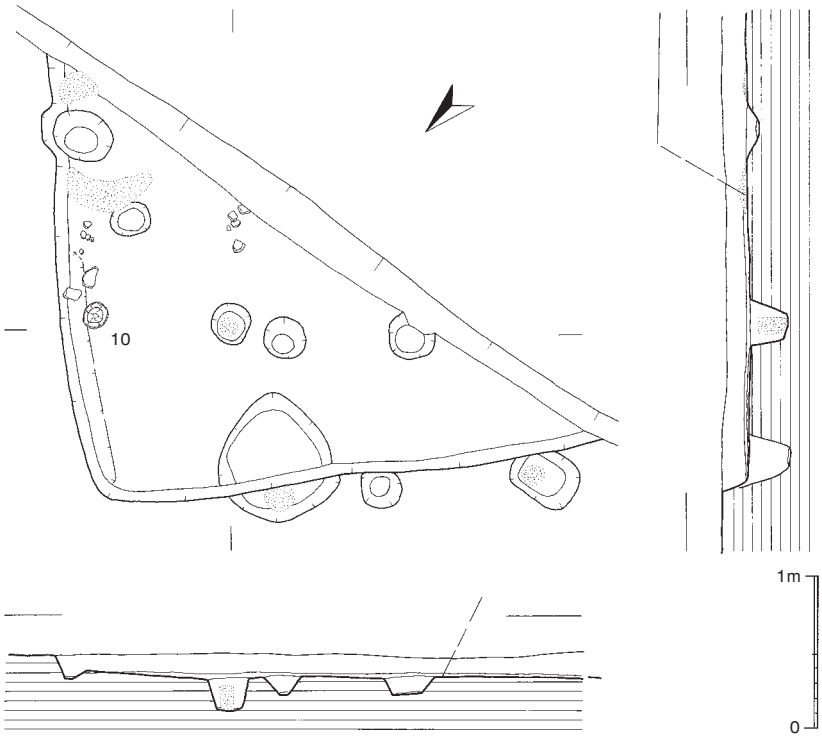
11　1号住居跡出土遺物（縮尺不同）

胎土には微細～石英小・中砂粒を多く含むほか雲母微細も含む。被熱による器面の摩滅が著しく、外面には煤が付着している。色調は淡黄橙～淡明橙色。

2号住居跡　SC－02

（12・13）

2号住居跡は、調査区の北西部に位置し、すぐ北西には1号住居跡がある。壁面の大半が調査区外に拡がっているためその全容は明らかでないが、北壁に残るカマドから一辺が4.8mほどの方形プランに復原される。壁面は垂直に立ち上がり、壁高は削平を受けて10～15cmと浅い。北壁にはカマドは付設されているが、袖の基底面を残すのみで遺存状況は良くない。カマドは、壁面から60cmほど緩やかな弧状に灰白色砂土を敷き固めて袖としている。カマド奥の壁下には35～40cmの楕円形プランをした深さが8cmほどの浅い窪みがあり火床と考えられる。被熱による赤変は弱いが、焚き口部には灰と炭片が散見された。また煙道はないが、壁面は窪みに沿って5cmほど弧状に突き出している。このカマド袖より壁隅にかけて浅い周溝状の窪みが観られたが、明確な周溝は巡っていない。主柱穴は北柱しか検出されていないが、柱間が3mほどの4本柱であろう。床面は固く踏み固められているが、明確な貼床は確認できなかった。遺物は少なく、カマド内から土師器高坏片と袖の西側壁下より須恵器坏が出土した。



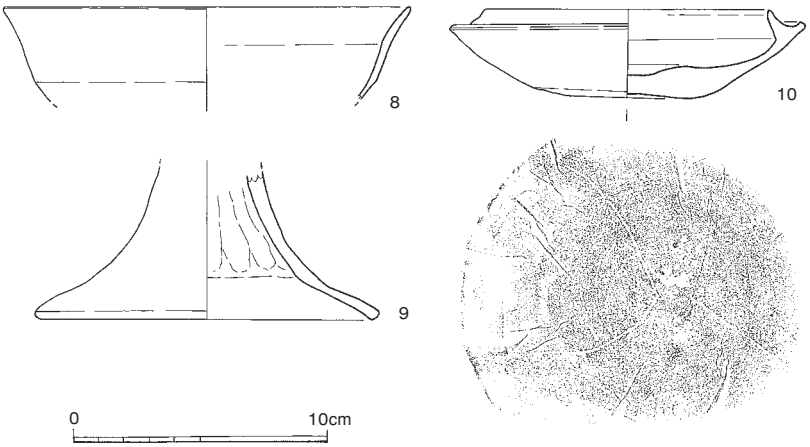
12　2号住居跡実測図（1／50）

13　2号住居跡全景（北東より）

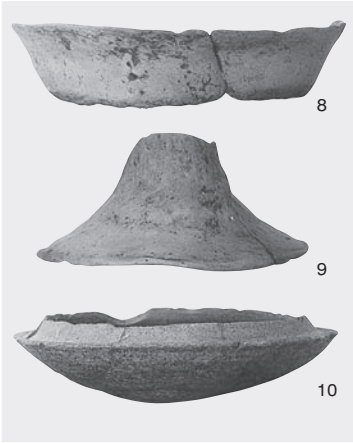
14　2号住居跡カマド内遺物出土状況（南西より）

出土遺物（14～16）

8は口径が16cmの高坏の坏である。口縁部は体部から緩やかに屈曲して外反



15　2号住居跡出土遺物実測図（1／3）



16　2号住居跡出土遺物（縮尺不同）

し、端部は上方に小さく摘み上げている。胎土は精緻で、微細砂と雲母微細のほかシャモット様の赤褐色小粒を含み、焼成は良好。色調は明赤橙色。9は高坏の脚で、脚径は13.6cm。ラッパ状に開く脚部は中位で緩やかに屈曲して弱い稜を作り、裾部はストレートに外反する。胎土は精緻で少量の微細～小砂粒と雲母微細のほかシャモット様の赤褐色粒を含む。色調は明赤橙色。10は須恵器坏で、口径は11.3cm、器高は3.5cm。体部は内彎気味に立ち上がり、肉厚の蓋受けは体部に直交して内傾する。調整は口縁部～体部が由粉で、内底面はナデ。外底面はヘラケズリでヘラ記号が刻まれている。胎土は精緻で微細～小砂粒を含み、焼成は堅緻。色調は外面が灰色、内面は淡明灰紫色。

3. 掘建柱建物跡（ＳＢ）

掘立柱建物跡は、９棟を検出したがいずれも１間×１間あるいは１間×２間規模の小規模な建物跡である。また、調査区が狭小なためにその詳細な分布状況は明らかでないが、現状では３号溝を挟んで東西に分かれて拡がる傾向が窺える。しかし、両者間には開削期に差異があり、建物跡の造営期には溝遺構の制約はなく、幾つかのまとまりをもって台地上に展開していたものと考えられる。また、構造については、礎板は未検出ながら方形のしっかりした掘り方から高床倉庫的機能が想起される。

4号建物跡　SB－04　（17・19）

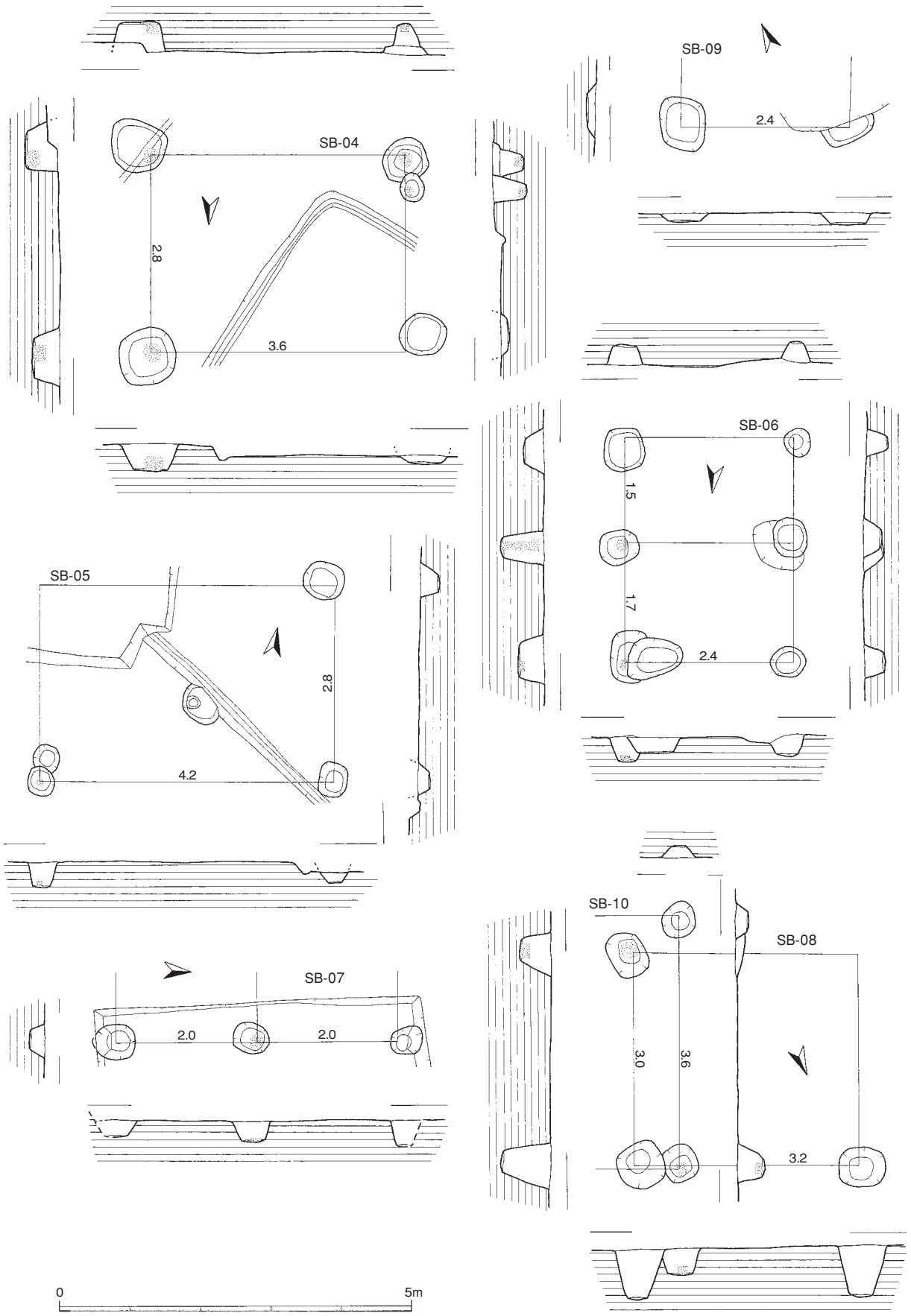
4号建物跡は、調査区の中央部にある東西棟の１間×１間の建物跡である。西側は5号建物跡（SB－05）や42・43号建物跡と重複するが新旧は明らかでない。また、1・2号住居跡（SC－01・02）と重複し、いずれよりも古い。梁行長は2.8m、桁行長は3.6mで床面積は10.08㎡。柱穴は65～85cmの隅丸方形で、深さは40～45cm。柱穴内には15～25cm径のしっかりした柱痕跡が残っていた。

5号建物跡　SB－05　（17・19）

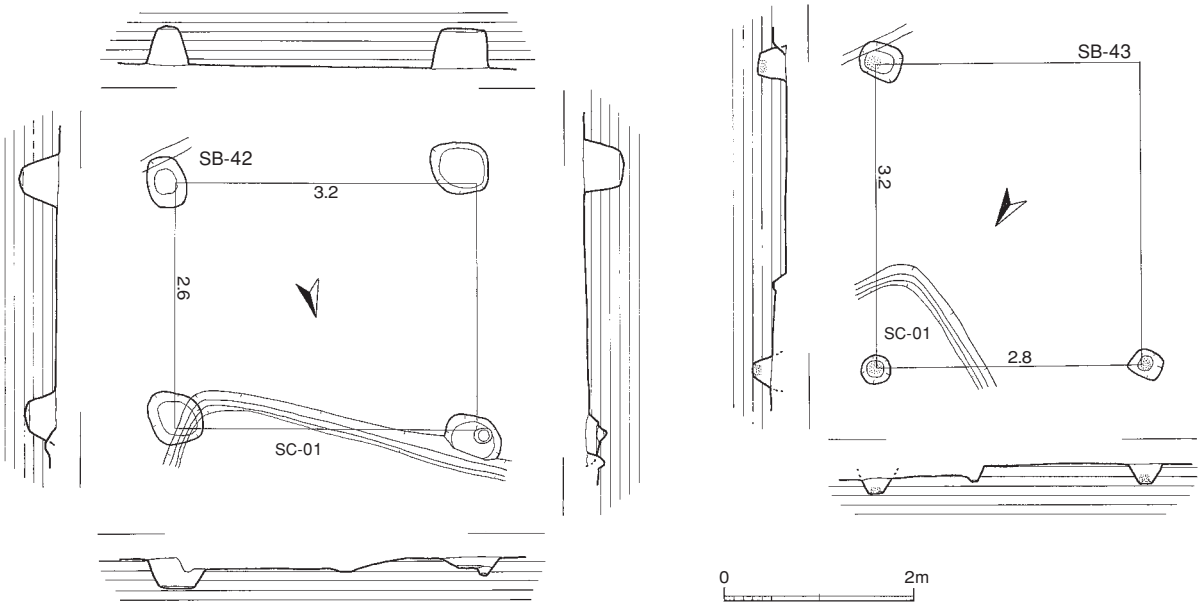
5号建物跡は、調査区の北西部に位置する１間×１間の東西棟の建物跡である。南桁柱側は４号建物

遺構NO	規　模	桁行全長(cm)	桁行柱間(cm)	梁行全長(cm)	梁行柱間(cm)	主軸方位	棟 筋	床面積(㎡)	備　　考
SB－04	1間×1間	360		280		N-1°-E	東西	10.08	
SB－05	1間×1間	420		280		N-55°-W	東西	11.76	SB05→SC01
SB－06	1間×2間	320	150・170	240		N-83°-E	南北	7.67	
SB－07	1間×2間	400	200・200	―		N-67°-E	南北		
SB－08	1間×1間	320		300		N-80°-E	東西	9.6	SB10→SB08
SB－09	1間×1or2間			―					
SB－10	1間×1間			―					SB10→SB08
SB－42	1間×1間	320		260			東西	8.32	SB42→SC01
SB－43	1間×1間	320		280			東西	8.96	SB43→SC01・02

Tab. 1　掘立柱建物跡一覧表

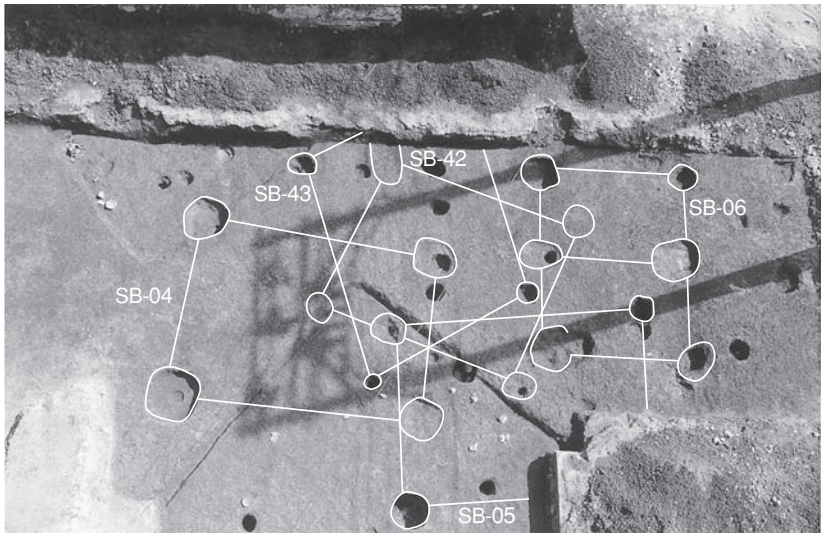


17　4～10号建物跡実測図（1／80）



18　42・43号建物跡実測図（1／80）

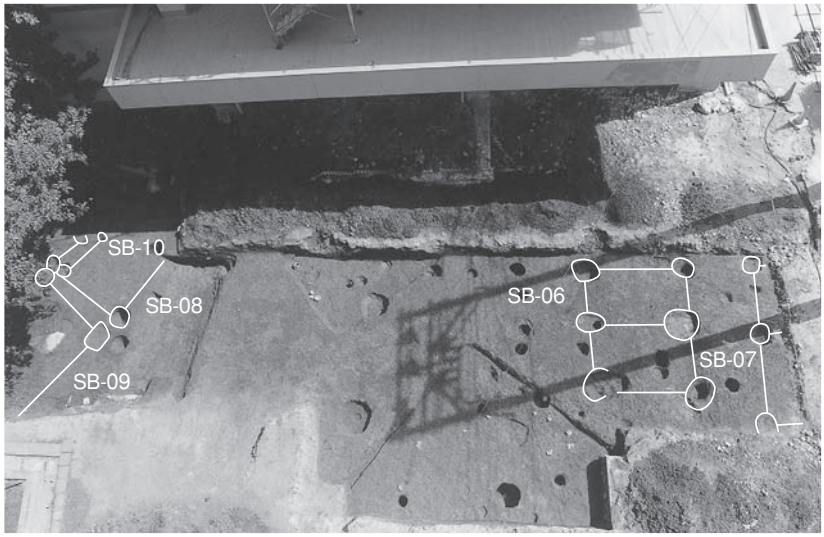
（SB－04）や６号建物（SB－06）など５棟の建物跡が折り重なるように重複している。また、東梁柱は1号住居跡（SC－01）と重複しており、住居跡よりも古い。梁行長2.8mに対して桁行長は4.2mと長大であり、桁柱の中間柱穴が消失した１間×２間の建物跡の可能性も考えられる。柱穴の平面形は、35～55cmの長方形で、深さは15～35cm。柱穴内には、径10cmの柱痕跡が遺存していた。



19　4～6・42・43号建物跡全景（北より）

6号建物跡　SB－06（17・19・20）

6号建物跡は、調査区の西隅に位置する１間×２間の南北棟の建物跡で、すぐ西側には7号建物跡（SB－07）が棟筋を並べるように隣接している。梁行長は2.4m、桁行長は3.2mで柱間は1.5m、1.7mを測る。柱穴の平面形は、50～70cmの方形プランで、深さは40～

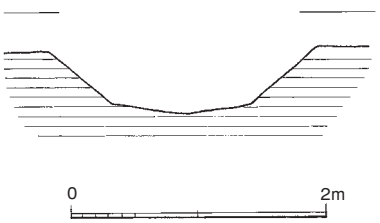


20　6～10号建物跡全景（北より）

65cmを測り、柱穴の中には径が15cmほどの柱痕跡が遺存していた。

7号建物跡　SB－07　（17・20）

7号建物跡は、調査区の最西端にある南北棟の建物跡で、西側桁柱が調査区外に拡がるが１間×２間の建物になろう。桁行長は4mで柱間は2mの等間である。柱穴は、50～55cmの隅丸方形プランをなし、深さは25～35cm。中央の柱穴には径20cmほどの柱痕跡が遺存していた。



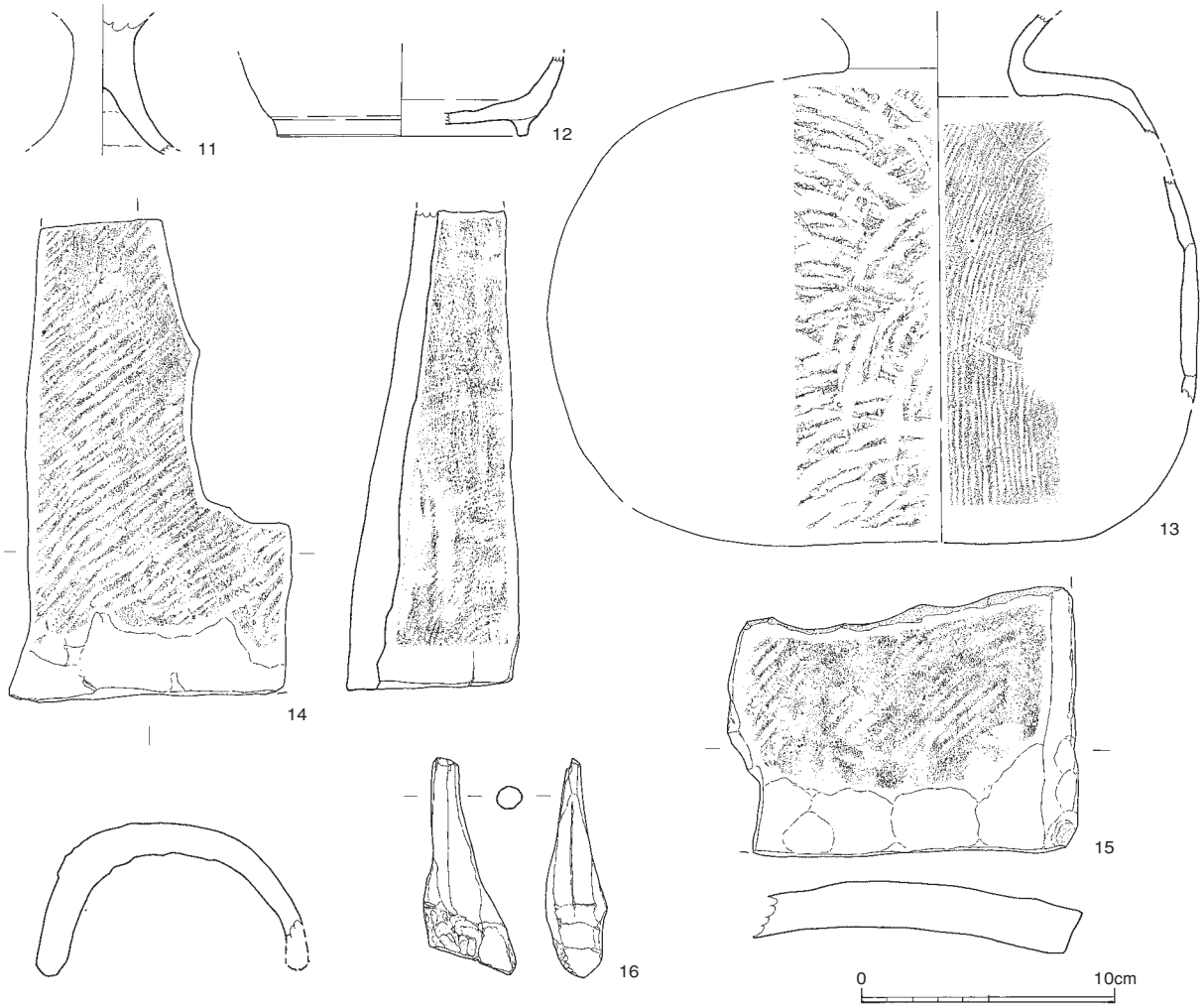
21　3号溝断面実測図（1／60）

8号建物跡　SB－08　（17・20）

8号建物跡は、調査区の東部にある１間×１間の東西棟の建物跡で、９号建物跡（SB－09）の南に棟を接するように位置している。また、東側梁柱は10号建物跡（SB－10）と重複し、それよりも新しい。梁行長は3m、桁行長は3.2mである。柱穴は55～75cmの方形プランを呈し、深さは45～75cm。北東隅の柱穴には直径が20cmほどの柱痕跡が遺存していた。

9号建物跡　SB－09　（17・20）

9号建物跡は、北東隅にある建物跡で、南には8号建物跡（SB－08）が棟を接するように位置する。北側の柱穴群が調査区外に拡がるために全容は明らかでないが１間×１間あるいは１間×２間の南北棟の建物跡になろう。柱穴は一辺が70cmの方形プランを呈し、削平に因り深さは15cmと浅い。



22　3号溝出土遺物実測図（1／3）

10号建物跡　ＳＢ－10　（17・20）

10号建物跡は、調査区の最東端に位置する建物跡で、8号建物跡（SB－08）と重複し、それに前出する。柱間は3.6mである。柱穴は50cmほどの隅丸方形プランを呈し、深さは20～40cmを測る。北側の柱穴底には直径が15cmの柱痕跡が遺存していた。

42号建物跡　ＳＢ－42　（18・19）

42号建物跡は、調査区の西部に重なり合う建物群の中にあり、北側桁柱は１号住居跡（SC－01）と重複し、それよりも古い。梁行長は2.6m、桁行長が3.2mの１間×１間の東西棟の建物跡である。柱穴は45～65cmの方～長方形プランを呈し、深さは30～45cm。北西隅の柱穴底には柱の加重痕と考えられる直径が15cmの浅い小穴がある。

43号建物跡　ＳＢ－43　（18・19）

43号建物跡は、調査区の西部に重なり合う建物群の中にある１間×１間の建物跡で、１・２号住居跡と重複し、それよりも古い。梁行長は2.8m、桁行長が3.2mの東西棟で床面積は8.96㎡。柱穴は30～45cmの方形で、深さが20～30cmの底には13～15cmの柱痕跡が遺存していた。

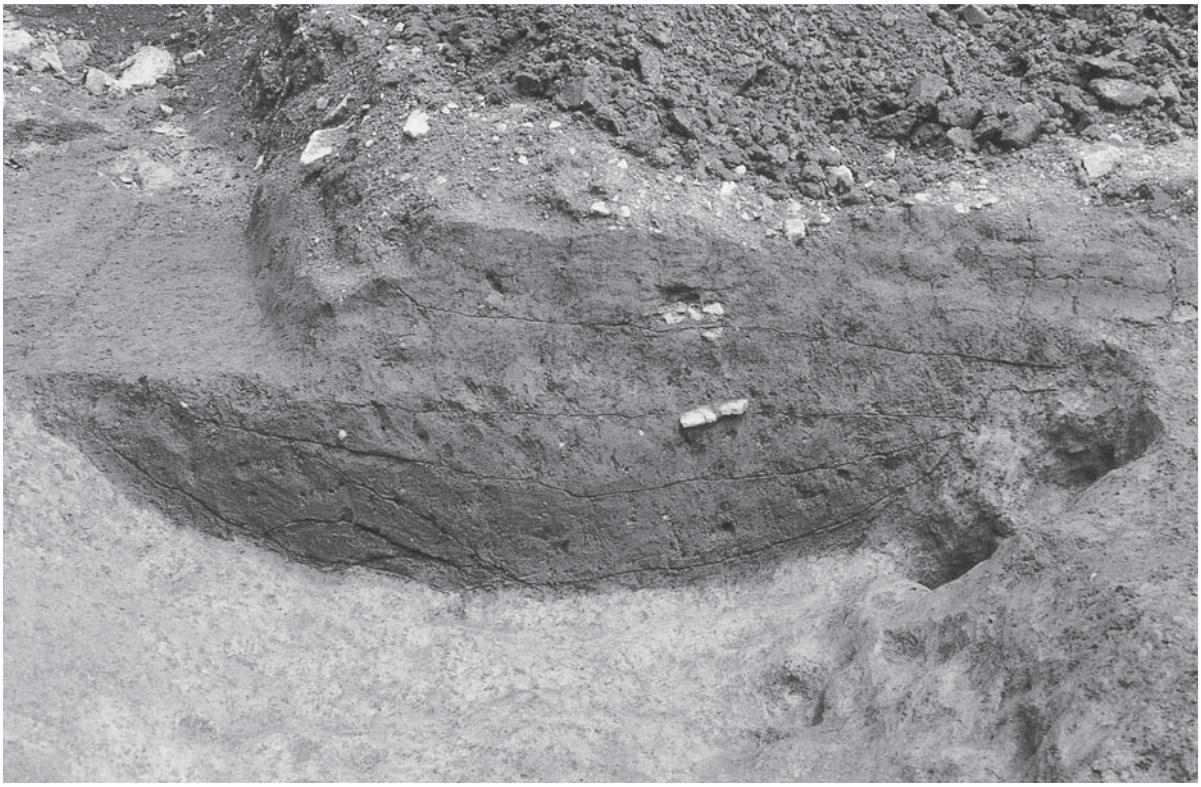
4. 溝遺構（ＳＤ）

溝遺構は１条を検出した。その規模や構造および方向性を勘案すると、集落域から一定の空間を画す機能があった可能性も想起されるが、その関連性は明らかでない。

3号溝　ＳＤ－03　（21・23）

3号溝は、調査区の東部を南北流する溝で、ほぼ磁北方向に沿って延び、３°東偏している。溝幅は225cm、深さは45cmで溝底は中央部が浅い凹レンズ状をなしている。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなしている。「遺物は、土師器や須恵器片のほかに瓦片が出土している。」

出土遺物（22・24）



23　3号溝土層断面（北より）

11は脚部がラッパ状に緩やかに外反する土師器高坏の脚部。胎土は微細砂と雲母微細を含み、焼成は良好。淡黒茶褐色。12は高台径が10cmの須恵器坏。体部は内彎気味に立ち上がり、高台は畳付を水平に整える。調整は体部がヨコナデ、底部は内面がナデ、外面はヘラ切り。胎土は精良で微細砂と雲母微細を比較的多く含み、焼成は堅緻。色調は内面が淡灰色、外面は淡赤褐色。13は須恵器横瓶。瓶部は長胴形で内面は粗い青海波、外面は板目状の叩き。口縁部は片側に寄って取り付けている。胎土は精緻で、微細～小砂粒と雲母微細を含み、焼成は堅緻。内面は明灰紫色、外面は淡灰色。14は赤焼けの行基式丸瓦で、内面には竹状模骨痕が残る。内面には模骨の綴紐痕と考えられる横方向の凹線が残っている。胎土は精良で微細～小砂粒と石英祖砂粒を含み、焼成は堅緻。色調は明赤褐色。15は土師質の平瓦である。上面はナデ、下面には棒状の叩き痕が残っている。胎土には微細～小砂粒と少量のシャモット様の赤褐色粒を含み、焼成は良好。色調は淡黄橙～明赤橙色。16は４面に研磨痕があり、手持ち型の砥石か。側面の一方が鋭角的に研ぎ込まれており、先端部は棒状をなしている。

5. その他の遺構と包含層の遺物

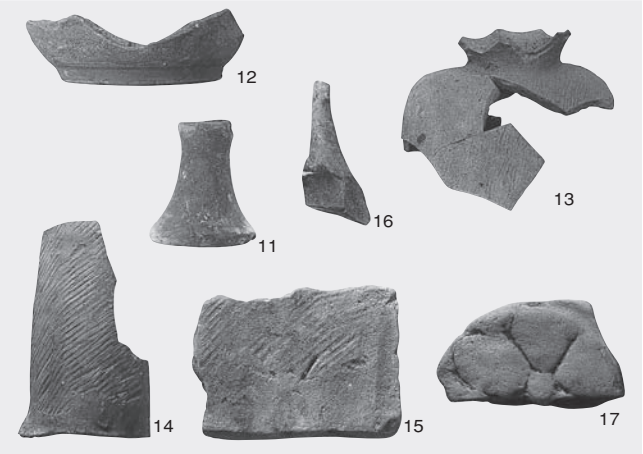
調査では、古墳時代の竪穴状居跡や掘立柱建物跡と古代の溝のほかに多くの柱穴を検出した。また、基盤層の鳥栖ローム層は２号住居跡から東へむかって緩やかに傾斜し、その上面には暗茶褐色土が薄く堆積していた。この堆積土には土師器や須恵器片のほかに瓦片が含まれていた。

出土遺物（24・25）

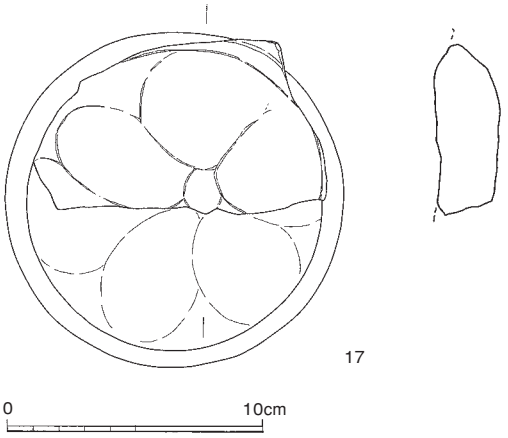
17は包含層出土の土師質の単弁軒丸瓦。花芯は中央部から外れ、６葉の花弁は非対称位なため全体的にバランスが悪い。胎土は精良で、比較的多くの微細砂を含み、焼成は良好。色調は淡明黄橙色。

Ⅲ. おわりに

第120次調査では、竪穴住居跡や掘立柱建物のほかに溝遺構と柱穴を検出した。しかし、調査区がトレンチ状の狭小な範囲のためその成果が直ちに遺跡の性格や機能を物語っているとは云いがたいが、周辺の発掘調査成果を勘案して今後の参考としたい。はじめに竪穴住居跡は、カマドを付設した７世紀代のもので数cmの厚さに鳥栖ロームを敷き固めて貼床としている。これは開析谷に面した丘陵端にも集落域が拡がっていたことを物語っている。一方、掘立柱建物は本調査区に限っては住居跡に先行するが、両者間にどれほどの時間差があるかは判然とせず、遺物的にひとつの集落域を構成していた可能性が考えられる。更に、溝や包含層から出土した行基瓦や６弁の軒丸瓦は、出土した磁北方向の大溝が単に集落域の区画溝ではなく、何らかの公的施設が存在したことを窺わせるに値する。



24　3号溝・包含層出土遺物（縮尺不同）



25　包含層出土遺物実測図（1／3）

報告書抄録

ふ り が な	なか 55
書　　名	那珂 55
副 書 名	那珂遺跡群第120次調査報告
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1036集
編 著 者 名	小林義彦
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810－8621　福岡市中央区天神1丁目8番1号
発 行 年 月 日	2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
なかいせきぐん 那珂遺跡群	ふくおかし はかたく 福岡市博多区 那珂2丁目18−1	40130	0085	33° 34′ 3 ″	130° 26′ 18″	20080809 ～ 20080828	128	屋外施設 改修工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
那珂遺跡群 第120次	集落	古墳時代 古代	竪穴住居跡　建物跡 土壙　溝遺構	土師器、須恵器、瓦	

那珂55

ー那珂遺跡群第120次調査報告ー
福岡市埋蔵文化財調査報告書1036集

2009年（平成21年）3月31日

発　行　福岡市教育委員会
〒810－8621　福岡市中央区天神1－8－1
電話　092－711－4667

印　刷　江口印刷株式会社
〒815－0082　福岡市南区大楠2－22－8
電話　092－531－4686